

今日、環境・社会の持続可能性などの複合的な問題の解決が求められていることから、個々の人工物を超えて、生活環境のシステムの転換を目指す「人間－環境系のデザイン」の研究を進めてきた。

本研究では、こうした研究の蓄積を踏まえて、「持続可能な社会のためのデザイン方法論」を構築する試みを展開した。まず、持続可能な社会のためのデザイン概念の再定式化を図るとともに、1960年代以降のデザイン方法論の動向を俯瞰した。次いで、現代社会の課題に対応するためには、「要素のデザインから関係のデザインへ」というシステムの拡大、「つくることから育てることへ」というプロセスの拡張を可能にする方法論が不可欠であることを確認し、さらに「多主体の対話によるデザイン」の実践について考察した。以上を踏まえて、持続可能な社会のためのデザイン方法論としての「デザイン学」の可能性を提示した。

1. 持続可能な社会のためのデザイン

デザインの決定的な特色は「計画」と「実行」を分離することであり、実行に先立つ計画をデザインと呼ぶ。この分離が峻別されたのは近代の機械の導入であり、大量生産・大量消費を基調とする20世紀の工業社会を支えるデザインの概念が成立したのである。

その結果、大量生産・大量消費される人工物によって、美しい景観や地球環境の破壊といった深刻な問題群が顕在化することになった。それに対して、21世紀を迎えて、環境を深く意識し、生活世界を再生するためのデザインを模索することが重要な課題となっている。その中で、持続可能な社会の実現を目指して、個々の人工物を超えて、人間－環境系をデザインする方法論を構築することが重要な課題となっている。

2. デザイン方法論の展開

1960年代のデザイン方法研究では、技術合理性に基づく「システムティックなデザイン」が提案されたが、1970年代に入ると、①技術合理性に根ざして問題解決を図るだけでは、現実の複雑で不確実な問題に対応できないことが明らかにされ、②状況からの応答や他者からの応答に耳を傾けながら柔軟にデザインを進める「対話によるデザイン」が展開されるようになった。

本研究では、デザインの本質が実行に先立つ計画であることを踏まえ、記号論を導入することで、デザインプロセスを記号過程とみなし、デザインの世界の構造、デザインの美学的・倫理的・論理的次元を探索する「デザイン記号論」を展開した。その結果、人間－環境系のデザインでは、デザイン対象・デザインプロセス・デザイン主体の拡大といったデザイン方法の記号論的転回が必須であることを指摘した。

3. 要素のデザインから関係のデザインへ

人間－環境系のデザインでは、人工物を単体として眺めることをしない。人工物は他の人工物、周囲の自然環境、社会文化環境などと関連づけられており、孤立しては存在し得ない。今日のデザインの課題は、要素としての人工物をデザインするだけでなく、人工物をとりまく諸関係をデザインし、豊かな生命と暮らしを育む生活環境を創造することである。そのために、「技術中心のデザインから人間中心のデザインへ」、「コモディティ・製品のデザインからサービス・経験のデザインへ」と拡張する必要があることを示した。

4. つくることから育てることへ

デザインにおいて何をつくるのかを問うためには、デザインプロセスを、与条件から解を導き出すマイクロプロセスにとどまらず、与条件を問い直すところから始めて、つくられたものが実際に使用され、その結果がデザインにフィードバックされていくマクロプロセスとして理解する必要がある。そこでは、ユーザーや環境からの応答をデザインにフィードバックすることにより、新しいものをつくるだけでなく、既存のものを育てる発想が重要な意味を持つことになる。保存・再生、プロダクトファミリーのデザインなどに認められる育てるプロセスについて探求した。

5. 対話によるデザインの実践

今日、デザイン問題はうまく定式化できない「意地悪な問題」となっており、専門・立場・セクターの異なる多主体が参加する「対話によるデザイン」が多くなっている。そこでは、デザイナーは決定案を探索することよりも、質問や論争を含む対話を促すための代替案をつくるようにしなければならないし、プロセス自体もデザインの対象となる。予測不能な問題に立ち向かうとき、「アブダクション(仮説推論)」「メタファー(隠喩)」「行為の中の省察」といったプロセスが鍵を握る。これらのイノベーションを誘発する対話によるデザインの仕組みについて深く考察した。

6. デザイン学の構築に向けて

本研究で探求したデザインという知の営みは、「分析」にとどまらず、「総合」に深く関わっている。こうした知の営みを、H.A. サイモンは「自然物の科学」に対して「人工物の科学」、日本学術会議は「認識科学」に対して「設計科学」として位置づけている。

今日、気候変動、環境破壊、社会格差の拡大など、深刻な社会課題が顕在化している。人間－環境系をデザインする方法論としての「デザイン学」を構築することは、個々の人工物のデザインを持続可能な社会の創造へと結び付ける手がかりを与えるものである。